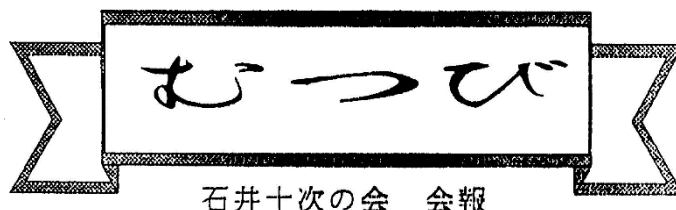


2023年  
(令和5年)  
2月10日



305号

ひかりの墓地から「月の雫」へ

彫刻家 田中 等

木城町中原出身の母は、時折の里帰りには私と妹たちを連れ立って帰っていました。国鉄バスで終点の茶臼原小学校で降り、帰りも茶臼原小学校のバス停まで歩きました。その時、母はいつも石井十次の墓のある墓地へ立ち寄り、石井十次の墓前の広みに座ってお弁当を食べさせてくれました。雑木林の中の墓地はとても静かで、ひかりがさんさんと降り注いでいて、幼い私にとってとても心地よい空間でした。

まだ幼い私に母の語る石井十次と言う人物がいかなる人なのか理解もできないでいた私が、後年に石井十次のブロンズ像を作ることに成るのですから、人は何処でどんな縁で結ばれているのかわかりません。

私と石井記念友愛社との不思議な縁については、かつて「開拓」第5号(平成10年6月30日)に寄稿させていただいたことがあります。友愛社理事長の児嶋草次郎君が高鍋高校3年間同じクラスでの友人であること、児嶋琥一郎氏の誕生の報を聞いて昇天された石井十次であったが、私の制作した石井十次像の序幕式の朝に琥一郎氏が亡くなられてしまったこと、また幼いころにはうっそうとした佇まいが非常に怖かったアンジェラスの森に私の彫刻制作工房を構えることになったこと、そしてアンジェラスの森で制作した3作目の彫刻作品が友愛社とは深い縁の倉敷市に設置される作品であったことなど、不思議な友愛社とのつながりを書かせていただきました。私は幼いころの石井十次墓地のひかりに導かれて来たような思いさえ感じます。

ただ、近年の日本ではパブリックな彫刻制作の発注が途絶えてしまい、アンジェラスの森で大きな作品を制作する機会はほとんど無くなってしまいました。そして並行して、私は海外の彫刻シンポジウムに招待されることが多くなり、殆ど海外に赴いて作品を制作するようになってきました。これまで

に出向いた国は19か国、海外で制作した作品は36点に及んでいます。しかし3年前の1月にインドのシンポジウム滞在中にコロナが急拡大し、何とか日本に帰ってくることはできましたが、その後に招待が決まっていた国は日本を出る直前に入国禁止となり、以降の海外での制作は閉ざされ、日本国内での仕事も全く無い状態となってしまいました。

しかし、かえってそのことによって、なかなか手掛ける時間の持てなかった作品集を出版する準備に集中することができ、高校時代の恩師である歌人の伊藤一彦先生との共著で、「月の雫」(鉦脈社 出版)という本を出版することができました。この本は私の国内外に設置された作品49点を収録し、その1点1点の作品に伊藤先生が詠まれたオリジナル短歌を添え、なおかつ海外でも読んでもらえるように、伊藤先生の短歌を Tanka として英訳したのも添えた、おそらく世界ではじめての現代彫刻と現代短歌のコラボした内容豊かな本になりました。

実は私が若いころに、伊藤先生が私の実名入りの短歌を詠んでいただいたことがあり、そのお礼としていつか伊藤先生に“返歌”をしなければならぬと長年思っていたことが、ようやくコロナ禍によって41年ぶりに実現した形になりました。

一昨年6月には、「41年目の返歌」とタイトルして、伊藤先生との公開対談を高鍋町美術館で開催しました。公開対談の第2部では、伊藤先生の高鍋高校の教え子であり、今でも伊藤先生と親交のある高校同級生たちにも登壇してもらいました。その中の一人が、石井記念友愛社理事長の児嶋草次郎君でした。

この対談のコーディネーターを高鍋町長 黒木敏之氏にお願いしたのですが、その後に思わぬ展開と成り、黒木町長が進めておられる高鍋駅周辺の整備事業の一環として、高鍋駅前ロータリーに私の彫刻“MOON DANCE”を設置させていただくことになりました。

原石重量20トンの、私の作品としては単体では過去最大の大きな御影石の作品で、今年の3月から制作に取り組んできました。この“むつび”が発行される頃には、ようやく高鍋駅前にその姿を現すことができると思います。

## 石川正樹著「石井十次を支えた先人たち」 発刊を祝す

編集委員 竹之下悟

「石井十次を支えた先人たち」が正月明けにめでたく発刊された。心から祝したい。

熱心な読者であれば「石井十次を支えた先人たち」がここ数年間「むつび」会報にシリーズ化して掲載されていたことをご承知だろう。

それを、むつび編集委員会が一冊にまとめて読みやすく再構成したものである。

著者の石川正樹氏は高鍋町の近世時代を研究する郷土史家として著名な方である。そして石井十次の会では監事・編集委員としても活躍されており我々編集委員はリスペクトの意を込めて「重鎮」と呼んでいる。

石川氏は、むつび編集委員に就任以来、原稿執筆の機会を積極的に獲得してきた。

編集委員であるがゆえに原稿執筆の機会には輪番的に訪れる。

ときに原稿依頼がうまく調整できずに編集委員が自己責任的に執筆せざるを得ないときもある。塗炭の苦しみとなる。

このように、穴が空きそうな危機的状況も石川氏が救済の役割を果たしてくれる。重鎮たる所以。

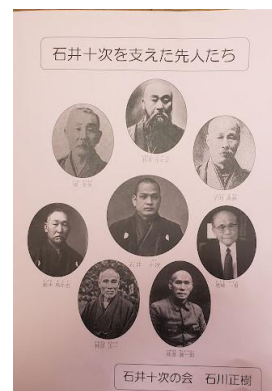
発刊趣旨は、石井十次を支えた先人たちにスポットライトを当てることにより、あらためて石井十次像をクローズアップさせたいとの試みである。この試みは、郷土史家としての豊富な学びと知識に基づいた内容であり高く評価されている。

その証として「石井十次資料館研究紀要」編集者・菊池義昭氏の目にとまることとなり、本年度の研究紀要(第23号2022年8月発行)にも掲載された。名誉なことであり喜びでもある。

今回の発刊(500部)は、石井十次の会の全面的な財政支援をいただいた。感謝します。

今後は、石井十次資料館等のガイド用資料として、更には訪問者の石井十次理解のよきテキストとしての活用も期待できる。

読者諸氏も、どうぞ活用いただき石井十次の人となりや十次の精神を今に受け継ぐ石井記念友愛社への理解をあらためて深めていただければ幸いである。



## 大原寿恵子夫人歌碑 ～（その2）

大原寿恵子夫人歌碑が立つこの辺りは、かつて石井十次が子どもたちと労働自活の孤児教育で開拓したところでした。

石井十次資料館の中に展示されている児島虎次郎と石井十次の長女・友の結婚式の写真をご覧いただきたいと思います。仲介の大原孫三郎と妻の寿恵子夫人は花婿と花嫁の両側に座っています。後列には石井十次が立っています。この写真を見る度、とても感動します。私はこの写真で初めて大原孫三郎と寿恵子夫人のお顔を知ることができました。



寿恵子夫人は前列右端

私は以前大原美術館に行った時、工芸東洋館の棟方志功室の中に、「大原寿恵子歌集抄」の表紙デザインを板画家棟方志功が板画で表現した作品を鑑賞したことがあります。

夭折した母親を偲んで長男の總一郎が棟方志功に表紙デザインを依頼し、昭和37年に「大原寿恵子歌集抄」は出版されました。

文責：徳地 順子

### 《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【広島県】高橋 千嘉子

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【高鍋町】石川 正樹

\*ここまでの掲載者は編集等の都合により1月20日までのものとしています。

★3月号の通信発送作業は 3月9日（木）10日（金）いずれも9時からです

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1  
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール [yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp](mailto:yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp)

編集後記

★「むつび」巻頭の1～2頁は彫刻家田中等氏より玉稿をいただきました。

作品の制作でご多忙中、誠にありがとうございました。

（編集委員 徳地 順子）